

『NEC ブラインドテニス

上海 ワークショップ』

事業報告書

2010年9月24日(木)～9月25日(金)

主催 アジアブラインドテニス普及促進協議会

協賛 NEC社会貢献室

協力 上海盲童学校
日本ブラインドテニス連盟
上海テニス協会

参加メンバー

武井 実良 (アジアブラインドテニス普及促進協議会 会長
日本ブラインドテニス連盟 会長
テニス発案者、B1チャンピオン)

金 教成 (アジアブラインドテニス普及促進協議会 副会長
韓国ブラインドテニス協会 副会長)

大野 博文 (中部地域ブラインドテニス協会
B1 プレーヤー)

松居 綾子 (アジアブラインドテニス普及促進協議会 事務局長
日本ブラインドテニス連盟 事務局長)

「NEC ブラインドテニス 上海 ワークショップ」を終えて

1. 開催理念

- 1) 障害者と健常者とのユニバーサルな社会実現の一助とする。
- 2) 国際交流により、障害のある人が夢と希望をもち、可能性を広げていけるようにする。
- 3) 世界中の人々に感動を与える。
- 4) 視覚障害児の豊かな心身の発達を テニスを通して実現する。

2. 開催目的: ブラインドテニスの海外普及

- 1) 中国の視覚障害児・視覚障害者にブラインドテニスを紹介し、その楽しさを体験してもらう。
- 2) 日本で生まれた新しいスポーツをパラリンピック種目にするために、アジアへの普及を進める。

3. 上海ワークショップに至る経緯と海外普及の現状

1984年、ブラインドテニスは、全盲の高校生、武井実良氏によって発案された。障害の有無に関わらず、誰でも一緒にスポーツを楽しみたいという彼の夢から生まれたスポーツである。スポンジボールの中に盲人卓球用の球を入れるというアイデアも、彼が試行錯誤の上、たどりついたものである。さまざまな人々の協力で、ルールが確立され、1990年10月に第1回の大会が埼玉県所沢市で開催され、今年は、21回目を迎えようとしている。

日本では、300名あまりのプレーヤーがいるが、このスポーツは、長い間、世界に知られていなかった。外国では、他の障害種のテニスはあったが、視覚障害者が空中に浮かんだボールを打つことは無理であると思われていた。つまり、不可能なスポーツであった。そのスポーツを可能にしたのが、武井氏が発案した音の出るボールである。

海外への普及は、2007年1月に全盲4名、弱視1名、晴眼2名の計7名がイギリスを訪問したところから始まった。スポンサーは、視覚障害児のジュニア講習会に協賛してくれた「NEC 社会貢献室」である。テニスのメッカ、イギリスでは、驚きと感動を持って迎えられた。2010年4月には、全盲とジュニアの指導を学ぶためにテニス財団から2名、メトロという視覚障害者のスポーツ団体から弱視3名が来日した。10月には、ナショナルテニスセンターで、3回目のトーナメントが行われる。

イギリス普及にあとは、アジアの普及を続けてきた。2007年9月に韓国、2008年9月に台湾、2009年10月に中国の天津である。韓国普及の後、シニアテニス協会の方々の協力で、「アジアブラインドテニス普及促進協議会」が発足。今回のワークショップに参加した金教成氏と、中村靖之介氏(故人)が、「人生を豊かにしてくれたテニスへの恩返し」として、ブラインドテニスに尽力してくれた。

2009年4月には、韓国ブラインドテニス協会が発足した。韓国では、12校ある盲学校への普及活動を終え、2010年8月には、「第1回韓国ブラインドテニス大会」を開催した。

今回は、中国第2の大都市である上海に普及することで、アジア・中国におけるブラインドテニス

の拠点を作ることを重点とした。中国には、37校の盲学校がある。人口が多いので、当然、視覚障害を持つ人々も多い。上海盲学校は、180名もの児童・生徒がいるが、さらに大規模な盲学校があるとのことである。日本の盲学校では、統合教育が進み、児童生徒数の減少と重度重複化が続いているが、中国では、盲学校での普及を進めていくことに大きな意味があると思う。

これまで、海外での普及を進めてきて、テニスの盛んな国、障害者がレクリエーションを楽しめる環境にある国での普及は速いと思う。アメリカ、オーストラリアではテニスのプログラムがすでに始まっている。(これらの国々へのテニスボールの送付も、NEC 社会貢献室が支援してくれている。) そのほか、レバノン、南アフリカ、ベトナム、フィンランド、ニュージーランド、カナダからも問い合わせがあり、ボールを送付した。

4. ワークショップの概要

9月24日(木)

- ・ コート設営
- ・ デモ・体育の先生たちへの指導
- ・ 歓迎会(昼食)
- ・ 開会式
- ・ デモ
- ・ 児童・生徒へのレッスン

9月25日(金)

- ・ 体育の授業におけるブラインドテニスのレッスン(3・4校時)

9月23日、深夜に上海市内のホテルに到着。

24日(木)、午前9時30分に上海盲童学校到着。体育の先生の協力を得て、テニスコートを作った。バドミントンコートのラインが利用でき、短時間で設営できた。バック、サイドともややスペースが少なく、天井も低いが、デモを行うには、十分なサイズであった。

まず、先生たちに武井氏・大野氏による全盲シングルスでのデモンストレーションを見てもらった。その後、武井氏と金氏、大野氏と松居がペアを組み、障害者と健常者がペアを組むミックスダブルスを行った。

その後、78歳のベテランテニスプレーヤー、金氏による、6名の体育の先生方へのレッスンが行われた。まず、ブラインドテニスの用具とルールを説明。それから実技に入り、ラケットの握り方、スイングを教え、落下させたボールを打ってもらった。運動神経のよい体育の先生たちなので、すぐにラリーができるようになった。アイマスクをして、ボールを打つことにチャレンジする先生もいた。

昼食は、歓迎会をしていただき、近くのレストランで中華料理をご馳走になった。

午後は、1時30分から、開会式が行われた。校長先生、上海テニス協会会長、武井氏、生徒代表の挨拶があった。新しいスポーツへの期待が感じられ、心あたたまるセレモニーであった。校長先生のお話からも、スポーツに力を入れている学校であることがわかり、子どもたちもファッショナ

ブルなスポーツであるテニスに憧れているとのことであった。

式の後には、子どもたちに、全盲シングルスでのデモを見てもらった。シニアテニス協会から来た人たちにも、新しいスポーツを知ってもらうことができた。

次は、いよいよ児童・生徒のレッスンである。この日は、学校が休みで、ブラインドテニスに興味を持った、運動の好きな子が多く集まったとのことであった。全盲が約 10 名、弱視が約 20 名。金氏が、用具とルールについて説明。その後、ネットを境にして、全盲と弱視に分かれ、体育の先生たちから、ラケットの振り方を教わった。

全盲は、紙コップに載せたボールを、弱視はワンバウンドさせたボールを打った。全盲には、なかなかむずかしかつたが、弱視は、すぐにボールを打つことができるようになった。弱視の小学生女子 2 人が、全盲の男の子にスイングを教えたり、球出しをしたりしている場面があり、ほほえましかつた。初めて出会ったテニスというスポーツに、興味を持ってくれたようで、うれしかつた。

25 日の午前は、体育の授業の 3 時間目と 4 時間目に参加した。3 時間目は、小学生 8 名、4 時間目は、中学生 8 名だつた。全員が、昨日のレッスンには、参加していない。そこで、昨日よりも、基礎的な部分を指導することにした。特に全盲の場合、身体全体を使った動作をすることが少なく、テニスのように重心の移動があるものは、経験が少ないからである。全盲への指導法を伝えることが、普及活動では大切である。

昨日同様、シングルスデモを短時間行った後、フットワークを取り入れながらテニスコートの大きさを知ってもらつた。それから、バスケットボールをアンダースローで投げることを身体の左右で行つた。ホースやロープを投げるという練習も行った。

3 校時目は、基礎練習で時間が終わってしまったが、4 校時目は、素振りとバウンドさせたボールを打つところまで進めることができた。

給食をご馳走になり、校舎やグラウンド、学校の歴史を知ることができる部屋などを見学し、1 時ごろ、終了した。

5. ワークショップの評価

これまでの普及活動ではしたことがなかつた、体育の先生方への指導ということがたいへんよかつたと思う。今後、指導をしていくのは先生たちなので、指導者の育成は、欠かせない。

体育館の床がたいへん滑りやすく、デモがやりづらかつた面があつた。しかし、今後もさまざまな環境でデモや試合をしていくことを考えると、日本のプレーヤーのレベルをさらに上げていくことが必要であると感じた。

コンタクトをとっていた英語の先生は上海万博で忙しく、夏休みには学校との連絡が取れなくなり、事前のコミュニケーションがたいへんむずかしかつたが、学校側から歓迎され、よい雰囲気での普及活動が行えた。

開催目的に対して

- 1) 中国の視覚障害児・視覚障害者にブラインドテニスを紹介し、その楽しさを体験してもらう。

2 日間のワークショップで、約 50 名もの児童・生徒が体験をしてくれた。空中のボールを捉えたときのうれしそうな顔は万国共通である。

2) 日本で生まれた新しいスポーツをパラリンピック種目にするために、アジアへの普及を進める。

アジアの大国である中国にブラインドテニスの 2 つ目の拠点つくることができた。天津と上海が連絡をとりながら、中国に普及が進むことが期待できる。

6. 今後の展望

校長先生が、盲学校 37 校の校長が集まる校長会でブラインドテニスを紹介してくれるとのことである。また、体育の先生は、まず、弱視から週に 3 回くらいの指導を始めると言っていた。

体育の授業を見ても、運動神経が良い子が多数おり、体育の先生の熱心な指導のもと、よいプレーヤーが誕生することが期待できる。

2012 年には、学校が 100 周年を迎えるが、その記念式典の際にブラインドテニスをやりたいと校長先生のお話があった。日本や韓国からプレーヤーに来てもらいたいとのことであった。友好的な関係を保ち、よい交流を続けたい。

また、来年の 8 月には、韓国で第 2 回の大会が開かれるが、その際には、日本のプレーヤーを招待したいとのことである。アジアブラインドテニス協会の設立、国際試合の開催が、具体的なものとして見えてきた。

7. 課題

一応、日本語と英語で作成した指導書はあるが、全盲の指導法は、確立したものがなく、日本でも試行錯誤の状態である。きちんとした指導方法、教材、DVD などを提供していかなければいけないと反省している。現地取材について、お願いはしたが、休日にあたってしまい、メディアの取材を受けることができなかった。(金氏が、「テニス Korea」に記事を出してくれるとのことである。)

8. お礼

今回は、微妙な社会情勢の中、出発前には、中国と日本の関係を心配したが、スポーツや教育には、壁はなく、素晴らしいワークショップであった。今回は、韓国の金氏が普及メンバーに加わり、日韓共同の中国普及となった。ブラインドテニスの広がりを強く感じる事ができた。

アジアは、欧米に比べればテニスが盛んではないが、ブラインドテニスは、今後も絆を深め、たくさんの人々と交流していきたい。

通訳については、最後まで心配していたが、当日の朝、黄さんが来てくれた。黄さんは、盲学校の保護者の友達で、大学院から日本で学び、日本在住の長い方である。黄さんの通訳がなければ、意思の疎通はむずかしく、ワークショップはスムーズに進まなかったと思う。

そして、今回、5 回目の海外普及のため、ご協賛いただきました NEC 社会貢献室に心からお礼を申し上げます。今回もたくさんの人々に、驚きと感動を伝えてきました。

ありがとうございました。

(松居綾子)

